

## 山女魚と岩魚

山女魚と岩魚は、溪流では一番ポピュラーな魚です。北海道に限らず日本の溪流でも岩魚や山女魚の仲間がいます。本州の溪流魚については、本による知識しか持ち合わせていませんので興味のある方は図鑑などを読んでみてください。北海道に生息する岩魚と山女魚について違いや習性などを書いてみたいと思います。

### 岩魚（イワナ）

北海道の全域に生息するも、知床山脈から流下する河川には、同じ岩魚の仲間でもオショロコマと呼ばれる別種の岩魚が多く生息する。岩魚は名前と通り岩の影など、山女魚に比べると暗い流速の遅い場所を好む。

体型は地域や同じ川でもかなりの差異が認められるが、一般には細長い体型で輪切りにした形はやや上下に長くなった楕円。体色も差異が認められるが、濃い茶から深緑の間が多く体側に白い斑点が点在する。斑点の大きさや数が地域差があり、未確認だが日本海側の河川源流域では本州の岩魚と同様に、朱点が混じる個体もあると聞く。通常、見かける岩魚は100%近く白い斑点の岩魚で、オショロコマが明確な赤い斑点があるのに対して明確な判別点となる。

オショロコマとの区別を付けるため「蝦夷岩魚」と呼ばれる事もあるが通常、釣り人の間では単に岩魚と呼ばれることが多い。ちなみにオショロコマは「樺太岩魚」と別名を持つ。また降海性が強く残っているのも北海道の岩魚の特徴で降海型はアメマスと呼ばれる。アメマスは河川型の岩魚に比べ体色が白っぽい事が多く特に初春、河川に遡上する個体は全身が銀色に輝いている（追記：主に道南地方の事を書いています）。

斑点の大きさも河川の岩魚とは違って、斑点というよりも斑紋に近い。ダム湖などが下流にある河川に生息する岩魚も、アメマス同様の姿をしている。北海道以南では源流の魚というイメージがあるが北海道の場合、河口近くから釣れだす魚で水温の関係があるようである。この為、山女魚など他の溪流魚に比べると河川の最上流に生息するといわれるが、山女魚と混生している河川もあり絶対ではない。

混生している河川では、山女魚などが流心に近い場所に定位していることに対し、落ち込み脇の淀みや淵の後方に位置している事が多い。釣りに関しては容易で、アワセも基本的に遅めの方が釣果はあがる。餌は市販のイタドリやブドウ虫、ミミズなど比較的餌を選ばない感があるが、道東地方の湿原流などではミミズの食いが良いように思える。

### 山女魚（ヤマメ）

北海道では、もっとも人気の高い溪流魚。北海道の全域に生息するも、ダムによる流れの寸断により、山女魚が生息しない河川が多くなった。基本的に北海道の山女魚は、全てサクラマスにより世代交代している。

サクラマスから生まれる稚魚は、春から秋にかけ12~3cmにまで成長するが、雌の大部分は翌年の春、降海しサクラマスとなる。したがって新子山女魚（稚魚）山女魚を除き、北海道の河川に生息する山女魚はその殆どが雄であり、雌の山女魚は極めて少ない。

成熟した山女魚は岩魚に比べて体高が高くかなり、上下にいびつな楕円をしている。体色は夏のシーズン中は薄い緑から茶色系に銀色の衣をまとったと変な表現だが、最大の特徴はパーマークとよばれる小判型の幼魚紋が残っている事である。また体側には黒点が認められ眼の中まで黒点（星）がある反面、背鰭には存在しない。ニジマスの幼魚が良く山女魚と間違われるが、背鰭の斑点の有無で簡単に判断する事が出来る。岩魚に比べると明るいところを好み、流速も速い瀬に付くことが多い。

餌に関しては岩魚と同様で、基本的には同じ物が多く使われる。特筆すべきは道北を中心とした山女魚釣りではイクラが多く使われており、事実イクラが一番食い良い。道南や道央の河川とは、地域差があると感じる。また先に書いたようにサクラマスと遡上しない河川（場所）には山女魚は基本的に生息していないが、下流のダムが大きなダム湖となっている場合、湖沼型のサクラマスとなり世代交代している場合も多い。道北の朱鞠内湖、岩尾内湖などが良い例ではあるが、降海するサクラマスとは違い資源枯渇の心配から河川で山女魚の採取が禁止されている例が多い。本州の山女魚は河川にランドロックされたものが多いと聞かすが、本州の一部の河川でもサクラマスが遡上していることから北方系の種族である事が判る近似種にアマゴとよばれる溪流魚がおり山女魚と同じ特徴を持ちながら体側に赤い斑点を持つ魚である。

## 抱卵山女魚の存在

先日、岩魚と山女魚の事を書きましたが、魚の遺伝子研究をなさっている方からメールを頂きました。その中で山女魚の雌の降海性について、お話を聞くことが出来ましたので紹介したいと思います。

要点だけを列記します。

山女魚の雌は遺伝子的には100%降海する事になっている。ただ新子山女魚の場合、一部の成長の悪い雌は二年目に降海する事もある。また雄に関しても2割程が降海するので産卵時にも雄のサクラマスが当然の事ながら存在する。また物理的な要因（すなわちダムなどで河川が分断されている場合など）で本来、降海するものがやむなく河川で残留する山女魚には、雌がみられる。また戻りシラメの存在というものが存在する。河川で銀毛と化した山女魚で殆どはそのまま降海するが、銀毛から元に戻るものがある。

河川に残留する雌山女魚の殆どが、このタイプらしいとの事です。

ただ現実に山女魚の雌を川で釣ることは非常に希です。事実上北海道の河川に生息する山女魚のほぼ100%が雄言っていると思います。ですから僕の山女魚に関して書いた雌山女魚の降海云々というくだりはほぼ100%と考えて下さい。完全に100%と言えないのは戻りシラメの存在で釣りに関しては抱卵山女魚という事になります。長年、山女魚を狙って釣りをしている方でも見たことのある人は少数だと思います。95年のシーズン終わりに十勝の河川で釣り上げた一匹の山女魚は抱卵山女魚でした。狙って釣れるわけではなく殆ど宝くじの様な存在ですが河川にも雌の山女魚が生息している事を確認出来ました。この川では下流から上流にかけてダムなどの障害物無い河川ですので、おそらくは戻りシラメと呼ばれるものなのかもしれません。

## 阿寒川にて規則の守られていない阿寒川の現状 (1997.8.10)

阿寒川は漁業権の設定されている河川で、釣りを楽しむ為に守らなければいけない決まりがあります。入漁料を初めとして、体長制限やキープ数も決められています。阿寒川の場合は体長30cm以下はキープは出来ません。そしてキープ出来る匹数は、一日20匹です。今回、川で漁協の方とお話する事が出来ました。

「餌釣りの人間は、小さい魚でも釣れるだけ釣って持って帰る」今回、お会いした方の言葉です。同じ餌釣りをする人間である僕にも、耳が痛くなるような話です。そのことを釣り人に指摘すると「針が吞まれたから」「頭深くに針が刺さって助からないから」などと弁明するとの事でした。

僕は決してC&R派ではありません。キープする事を前提とした山女魚釣りを楽しんでいる人間です。しかしながら、阿寒川で言われるような行動は、僕が聞いても哀しくなるような話です。指摘された釣り人も規則は判っている筈です。規則が判っていてもそれに反する行動をとる。確信犯ですよ。

僕に言わせれば、禁漁河川で釣りをする。禁漁期に釣りをする。もっと言えば、泥棒と同じ行動をとっているとした言いようがありません。ルアーやフライをする方からも、餌釣りの人間に対しては厳しい意見がある事は僕も知っています。そして先に書いたように、心ない餌釣り師が多いのも事実だと認識しています。

渓魚を食べたいから釣りをするという僕も、新子山女魚は釣ることがありません。理由は自分のモラルスタンダードに、新子の半分は雌のサクラマスになり産卵する魚であるという認識があり、明日の山女魚釣りを続けていたいと思うからです。僕の考えの全てが正しいとは思いませんが、今の時代、渓流釣りをする人間であるのならば、危機感を持った上で、考えた行動をする必要があるのは間違いのない事でしょう。

色々な考えがあると思いますが最低限守らなければいけないのは規則だと僕が思うのは間違いなのでしょうか・・・。札内川上流に山女魚の稚魚が放流され、その真下で数多くの釣り人が群がり、放流直後の山女魚を釣る写真が新聞に掲載していました。記事には太公望という言葉が使われていました。不思議な事ですね。

僕は言葉は悪いですが、間違い沙汰だなと感じてしまいます。そりゃ放流直後に竿を出せばたくさん釣れるでしょうが、あの山女魚達は市内に近い家族連れが楽しめるようにと放流された物でしょう？まあ実際は観光促進の為に放流したのですが、基本的には子供にも楽しめる為というのが本筋だと思います。川を楽しみ釣りを楽しむというのが望ましいと僕が思う姿です。

それを大の大人が、小さな山女魚を釣れるだけ釣っていく・・・。哀しい姿です。そんなに釣りたいのなら釣り堀に行けば良いと思うのですが決まってお金を払ってと反論する人が何人いることか・・・。阿寒川での話を思い出すとそう感じてしまいます。

溪相良く深い森に囲まれた阿寒川。魚影濃ければ素晴らしい流れです。昔の釣りの本に書かれていた素晴らしい釣り場は将来戻ってくるのでしょうか。(1997年8月10日掲載)

2011年5月21日追記

この頃の僕は、十勝で盛夏のみ山女魚を追う釣り人でした。この後ルアー釣りに転向して今に至るわけですが、読み直してみても、当時の阿寒川を状況を嫌っていた感があります。現在ではノーキルゾーンの設定など、良い方向に進んでいる様です。また、漁協の方と書いているのは、ご想像通り「徳さん」ですね(2010年09月14日逝去されたそうです)。

## 山女魚釣りのシーズンを終えて

北海道の山女魚釣りは、3月頃から晩秋まで釣る事が出来ます。禁漁は、春から初夏にかけての二ヶ月間。道東では5～6月が、禁漁期間です。禁漁前は確かに釣りにはなるのですが、雪代水と気温の低さに僕は耐えられない部分があり、自分にとっての山女魚釣りは、7月1日の解禁後という事になります。

今年の釣果はどうだったのか。今年は5月が異常な低温で、6月の中旬は気温の低い日がありましたが、中旬から下旬に天候が回復して7月は暖かい日が続きました。解禁後の釣果も順調で、今年の越年山女魚は型もよく、数も平均して多かった様です。僕は思うのですが、昨年（96年）が記録的な冷夏で、山女魚がそれ程多く釣られなかったのが原因ではないのかなと思っています。

実際に竿を出してみると、夏山女魚のセオリー通り、瀬で釣れる個体が多く数も多い感じですが。ただ数は出るものの中型が殆どで、大型は姿を現しませんでした。尺山女魚とは言いませんが、8～9寸の山女魚が出なかったシーズンでしたね、今年は。そのかわり、6～7寸が多く釣れました。センチで言うと、20cm前後の山女魚。大物指向の人ですと小さい小さいと言うでしょうが、北海道の山女魚は本州に比べると型は小さいのが普通です。山女魚の故郷と言われる道北地方は、川にもよりますが水温が低いせいなのか型は一段と小さいです。

十勝の山女魚も型は本州に比べると小さいとは思いますが、体高は逆に北海道の方が幅広の個体が多いと感じます。釣りの本を見ていても特殊な環境、例えば本流釣りなどでしか体高の高い山女魚はお目にかかったことはありません。今年は幅広が好調で、釣った山女魚の2割は幅広でした。上流域よりも中流の瀬が好きなのが、理由なのかもしれません。深い瀬と餌の豊富な中流域。そして、厳しい自然環境である日高山脈の河川は、夏は駆け足で走り抜ける場所です。自然の中に生きる山女魚は、短い夏の間たくさんの餌を食べて太っている（笑）のが幅広なのかなとも思います。

幅広のシーズンは短く、解禁から一週間位間を置いて良くて7月一杯でしょうか。この時期の天候が悪い年は、もう泣きそうになります。一年の間で、たった3週間くらいしかないのです。冬を耐え、遅い春を心待ちにして禁漁期間があげ、「そりゃ～」という時期に釣りが出来ないなんて最悪です（笑）。

こうして短い7月の最盛期を過ぎると、暑い夏山女魚の時期がきます。水温も上がり川は渇水気味で、一年の中で一番山女魚釣りが難しい時期でしょうね。夏山女魚は一里一匹とか言われているようですが、流石にこれはオーバーです。一里（4K）で一匹だったら、魚が居ないと思われそうです（笑）。でも難しいのは、間違いのないところでポイントも流し方を考えて釣らないとアタリすら出ません。日中は太陽の日差しが川面に降り注ぎ、唯でさえ難しい釣りが余計難しくなります。ですから溪流釣り師は、早朝薄暗い時間に釣り始めるわけです。

ところが基本的にいい加減な釣り師の僕は、早起きは殆どしません（笑）。お昼頃出かける事が多い人間で、午後既に人が釣った後を釣ることが殆どです。流石にこの時間は地元の釣り人は少なく、遠征組が少々いる程度。大抵は自分の好きなポイントに入ることが出来ますね（^^）。但し釣果はそれ程望めません。とは言っても”つ”が抜ける位の釣果はありますが・・・。その中で小さい山女魚はリリースしますので、持ち帰る山女魚は大抵は5～6匹でしょうか。

そうこうしていると盆が過ぎ、9月近くになると鮭が遡上してきます。そして川にもよるのですが、山女魚も婚姻色に染まって産卵時期が近い事を教えてくれます。釣り上げて山女魚を掴むと、白子が飛び出してきます。この山女魚が釣れる頃が、シーズンの終わりなんですね。少なくとも僕にとっては。

新子山女魚はこの頃から最盛期に入りますが、常々書いている様に新子は明日の山女魚釣りの資源です。サクラマスとなる山女魚達ですと、僕は思っているのですがどうなのでしょうね。

こうして僕の山女魚釣りは、今年は終わりました。来年の開幕まで10カ月です(笑)。殆ど7~8月の人間です。一年のうち夏しか釣らない人間が、溪流釣りのHPを開いているなど笑われそうですね。

(1997年9月6日筆)

## 十勝の溪

### 天馬街道

南十勝を流れる河川の一つに、豊似川という川があります。十勝の名流と言われ、現在でもシーズンになれば沢山の釣り人が釣りを楽しんでいる川です。この豊似川と平行する道が、国道236号線です。通称「天馬街道」と名前がつけられました。今年の秋に日高側とつながって、これまでは襟裳岬経由で日高へ向かっていたルートに比べて、走行距離が減ります。また難所と言われた黄金道路に比べ、崖崩れや高波による通行止を考えると開通したメリットがあると僕も思っています。

しかし、失った物もあります。釣り師なのでまた川の話になるのですが、初めて豊似川にある上流の橋から入溪した事を思い出しました。豊似川は北海道の河川としては溪相が荒い川で、上流域は溪谷を流れ深い淵と落ち込みの連続する溪流です。浅い瀬の中に徒渉ルートを見つけながらの遡行で、やがて落差2m程の小滝となっている場所にたどりつきました。滝壺となる淵は深く、岸には足場も少なく深さは5~6mはあるでしょう。十勝に移り住んでから長い竿が必要だと感じたのは、豊似川なんです。

高い足場から淵を釣るなど、道央や道北の溪流ではあまり経験がありません。勿論、例外はあるのですが、十勝の溪は規模が大きく淵の深さもあります。その淵で竿先まで送り込んだ時、竿先に魚信を感じました。やがて上がってきたのは、鱒の様に青色をしている山女魚でした。深い薄暗い淵に潜んでいた事を思わせる魚でこれ以降、同じ様な山女魚が釣れた事はありません。この山女魚の釣れた淵が、今年は見事に埋まっていたのです。正確には二年前に埋まっていたのです。砂礫と砂によって。玉砂利と丸石が主体の豊似の上流域ですから、例え大水が出て埋まることは考えられません。上流域には、森の残っている河川ですからね。原因はただ一つ。国道の工事です。多分、橋の工事で出た土砂によって、埋まってしまったのでしょう。

国道が開通した今、願わくばかつての豊似の流れが復活するかどうか。交通量の増大と訪れる人も増えようとしている豊似川。美しい十勝の溪が今後も残ることを願わずにはられません。

### 美しい歴舟川

帯広から国道を南下し、大樹町という町で渡る大きな川が歴舟川です。単独河川としては十勝でも大きな川で、沢山の支流と長い流程を誇り、水質も何回か日本一に輝いた川でもあります。溪相が荒い事でも有名な川で、入溪出来る場所は非常に限られており、多くは深い峪の下を悠々と流れているのを眺めるのみの川です。荒い溪という事で帯広に住んでからも、釣りには数回しか入った事はありませんでした。

今年(97)のシーズンは、新しい釣り場に行ってみようと思う気持ちもあり数回、歴舟の支流に入溪しました。どこの支流も流石に水質が良いと思わせる流れでしたが、中でもヌビナイ川の中流域某所の流れは素晴らしいものでした。そこは溪谷となっている場所から少し上流に上った場所で、瀬が中心の流れでした。夏の瀬に住む山女魚は非常に警戒心が強く、流れに反した流し方をするとアタリも全く出ない強者が多く、ヌビナイの流れもそうでした。

白く泡立つ落ち込みから緩流になる複雑な流れを読み、などと釣りをしていた僕の目に入ってきたのは、穏やかな流れでした。かといって、流れが緩いわけではありません。水深は1m位で水面は穏やかそのもので、底ははっきりと見えます。しかし流れは速く、遡行するのもかなり苦勞する程の流れです。流れが速いのに水面が静かなのは、底が玉砂利が多いことと、大きな石も丸いものが深い場所にあり水は泡立たず流れているのです。

玉砂利も非常に美しく、白系と黒系が交互に並んでいるかの様に美しく、大石も大理石の様に白っぽい石に黒い点々

が、入っています。その上を流れは見た目は穏やかに、しかし速く流れている。その透明感溢れる流れが歴舟川なのでしょう。目を凝らすと、大石の表面には川虫が動いているもの見えます。

初めて歴舟川にアタックしたのは、10年前でした。夜通し札幌から車を走らせ、夜明け前に入渓し惨敗を喫したと感じたその時、太陽の光に輝く溪谷の姿に心を打たれた事がありました。かつてはゴールドラッシュで沸いた歴舟川。今も訪れる毎に何かを感じる事の出来る場所なのかもしれません。(1997年10月12日)

## 思い出の溪

荒れた廃道を進んでいくと、目指す溪の支流が目の前にあらわれた。水量も少なく、4WD車では簡単に渡れるような流れだ。林道脇の広場に車を停めて釣り支度を急ぐ。7月だと言うのに吐く息は白く、気温は10度あるかないかの低さだ。川は典型的な道東の流れが溪流になった感じで、流速のある瀬が多いものの河原は極めて少なく、岸には熊笹が張り出して独特の雰囲気を作り出している。知床の溪の主役は、オショロコマ。流速のある場所よりも、流れの緩やかな場所を好む魚だと本に書いてあった。

餌を流れに入ると、一投目からアタリが出る。道糸の目印が、スーとゆっくり移動するのがわかる。オショロコマの場合は、ここでアワせてはいけない。1秒くらいの間をおく気持ちでアワセを入れると、丁度良いのだ。

心地よいバイブレーションが伝わり、水面から魚が飛び出してくる。ルビーのような赤い斑点を散りばめたオショロコマ。大きさは小場所なので、20cmを切るくらい。人の入っていない釣り場では、同じポイントに何匹も魚がいる。餌を替え同じポイントに振り込むと、またアタリが出る。釣っては放してを繰り返していると、段々釣れるサイズが小さくなっていく。

ポイントをかえながら、目標である本流との合流点を目指して釣り下る。途中の魚影の濃さは特筆もので、その濃さは今の知床とは比べ物にならない。川の何処に餌を入れても、必ずアタリがある、まさに最後の魚の楽園ともいえる場所であった。

やがて、本流との合流点が見えてきた。当たり前の事ながら本流は水量が多く、溪流なのに激しい蛇行を繰り返している流れだ。支流はナメ滝の様に本流にそそぎ込んでおり、その直下は深い淵になっていた。

仕掛けのオモリを大きなものに替え、餌を振り込む。すぐにアタリが出て、25cm位のオショロコマが釣れた。やはり、大場所は大きい魚が付いている。それからこの淵で何匹かけただろうか。同型のオショロコマで20匹は釣れた。型の小ささ魚を数に入ると、30匹は同じ場所で一步も動かずに釣ったと記憶している。

逆に言えば、この警戒心のない純粹さが、オショロコマの枯渇する原因にもなるのだろう。山女魚などではよほど上手に釣らないと、同じ場所では場荒れして後が続かないものだ。思えば、この頃は僕も資源保護という意識が少なかった。釣れた魚は小さい魚はともかく、型が良ければ全て魚籠に入れていた。

幸いな事に、数年後同じ場所を訪れた時も、魚影の濃さは保たれていた。自然の保たれている、知床ならではの事なのだろう。この頃は、食べる分だけ魚籠に入れる釣りへと変わってきていたのだが、今思い出しても昔の節度ない釣りが恥ずかしい。あれから10年近くたち、魚影濃いこの場所も健在の筈だ。林道の入り口が閉鎖されてしまったこと。何よりも、林道手前の敷地が立ち入り禁止になったので、徒歩以外でこの釣り場へ行こうとするのは困難だからだ。

たとえ釣り場に行けても数匹釣れれば、魚の姿を見られればそれで満足出来ると言ったら、信じて貰えるだろうか。格好つけているように思えるかもしれないが、知床の溪はそのまま残してあげたいと思う魚の楽園の一つなのだ。

(1997年11月23日筆)

## 釣りと川を考える

北海道は溪流釣り王国、溪流釣りのメッカとされています。どこの川でも沢山の溪流魚が釣れた昔は、その例えも正しかったと思います。しかしながら、現実に王国と言える河川が今の北海道にあるのかどうか。

耳にするのは、「昔はこの川にも沢山の魚がいた」。「釣れなくなった」という声が聞こえてくるのが現実です。確かに、今でも魚影濃い釣り場が残っているのは間違いのないところだと、僕も思うのですが、魚影が年々少なくなっているのは紛れもない事実だと思います。

魚影が減った原因は一つではなく、沢山の要因が重なっていると僕は感じています。その一つは砂防堰堤の構築。ダム建設で、下流と上流の流れを寸断してしまった事です。ダムにより溪流魚の産卵場所である上流まで、魚が遡上出来ない。都会で生活する人間にとって、ダムはある意味で必要悪な存在であることは僕も理解しています。何万人もの人々が生活する都会では、水道の蛇口をひねれば水が出てくるという利便さはダムがもたらせたものです。

「しかしながら本当に必要な？」と感じるダムも多いのは事実です。詳しくはリンク集の自然環境から、詳しいページにいくことが出来ますので、ご覧になっていただければと思います。本当に必要なダムであっても、魚道が設置されていない。魚道が設置されていても、作りっぱなしで土砂に埋もれている魚道も数多い。結局はダムの構築にとまなう”オマケ”的存在にしかなくなってないのが現状です。

川に優しい治水工事など、関係官庁のパンフレットには唱われているこの頃ですが、川に優しいというのはハード的な物だけであって、ソフト的なすなわち管理や実態調査などは、まったくと言っても良いほどなされていることはないでしょう。加えて河川工事が北海道では急ピッチで行われています。

100年、200年に一度の洪水に備えるとの名目ですが、やることは決まっています。上流にダムを構築して下流の流れは浅く広く真っ直ぐに河川改修。

失われた流域の自然は多分、数世代にわたって帰ってくることはないでしょう。

余談ですが、アメリカなどでは現在このような大規模な河川工事は、財政面と自然保護を考えた上で行わないことが多いそうです。地震などと違って、現在は気象観測などで、事前に洪水の発生することは予想出来る。この間に住民を非難させ、失った家屋などは国で保証する。この方が何百年に一回の洪水に対策するよりも、はるかに少ない予算で対処出来るらしいのです。日本では地域住民がこの事を考えた場合に、どのよいに判断するかは興味深いところです。自然よりも、自分の土地や家屋が大事だという人もいるかもしれません。悲しい話なんですが、結局は国側のこれまで行ってきた教育と政策の結果でしょうか。金が全てという価値観が、日本を支配しているのは若造の僕が言うのもなんですが、恥ずかしい事だと思います。(1997年11月23日)

## 新仔山女魚考

北海道ではお盆を過ぎる頃から、新子山女魚と言われる釣りのシーズンに入ります。雪代山女魚、越年山女魚、幅広山女魚、木の葉山女魚、紫山女魚など、シーズンやそのときの姿に釣り人がつけた名前です。このことから、北海道での山女魚釣りの人気が判るというものです。さて新子山女魚とは一体何者なのか。他のページでも書いていることなのですが、山女魚の生態をまた書いていきたいとおもいます。

北海道に桜の花がさくころ、海から大きな魚が川に遡上してきます。これがサクラマスで、桜の花の咲く頃に姿をみせることから、サクラマスの名前がつけられたと言われている魚です。夏が過ぎ秋が訪れる頃、それまでは下流や中流の淵などに潜んでいたサクラマスは、上流に向かって遡上を始めます。この頃になると、河川に住む山女魚も鮭の様に婚姻色に染まり、その腹の中には白子が蓄えられています。そして上流の小砂利の多い場所で産卵床を掘るサクラマスに寄り添う様、サクラマスの雄の役目を果たすのです。勿論サクラマスにも雄がいますし、山女魚の役割は自分の子孫を残す本能だと思いますが、問題なのは雌の山女魚は殆ど見かける事がないということなのです。

無事に産卵されたサクラマスの卵から孵化した幼魚は、春になると川岸の流れの緩い場所に群れています。この時は数cmの小さな魚で、アメマスやニジマスなどの格好の餌でしょうか。やがて気温があがり水温も上がってくると、この幼魚達は沢山の餌を食べ急速に成長してきます。初秋の頃には、10～12cm程の可愛い山女魚となります。この魚を、新子山女魚と呼んでいるのです。

この新子山女魚は、このまま河川で冬を越し、やがて春になると銀毛山女魚となり海に下っていきます。このとき雌は、ほぼ100%近く下ってしまいますので、河川で釣れる幅広や越年山女魚の殆どが雄をいうことになります。抱卵している山女魚が珍しいと言われるのは、この理由によります。この海に下った銀毛山女魚が、海で沢山の餌を食べ大きなサクラマスに育ち、河川に遡上して産卵するというのが、サクラマスを含めた山女魚の一生です。

鮭を違ってサクラマスの場合は、幼魚の一年以上を河川で過ごす為に、サクラマス漁の盛んな道南地方では河川の堰堤に魚道が構築されています。サクラマスが上流に上らなければ、資源が減少することを知っているわけです。また人工孵化によって山女魚の幼魚を河川に放流し、資源の増殖を図っていることも多く、秋になるとサケマス増殖河川では盛んに放流されている河川も多い様です。これで新子山女魚のおおよそは、お分かり頂けたと思います。

釣りとして新子山女魚は、どういう位置にあるのでしょうか。新子山女魚釣りは、まず典型的な数釣りの世界です。何十匹は当たり前、腕の良い人でしたら100匹200匹という数を釣るのは、簡単な事です。

僕が考える新子山女魚釣りの問題は二つあります。一つは、漁業サイドとの摩擦があげられます。彼らはサクラマスの増殖の為に、盛んに幼魚（新子）を放流しています。そこに法的な規制がないからと言って、釣り人が放流した幼魚を釣り上げてしまえば、彼らはどう思うのでしょうか。確かに川は漁業関係者だけの物ではありませんが、サクラマスを増やそうと放流した魚を無節操に釣り上げてしまう行動では、釣り人が非難されても仕方のない事だと思います。

そして最終的に待っているのは、禁漁という釣り人の締め出しなのです。行政側も遊漁者よりも漁で生計を立てている側を重要視するのは当たり前の話で、ましてや第三者的にみても釣り人側に非があるこの様な場合は、釣り人は勝ち目はないでしょう。

もう一つの問題は純粋に資源保護、自然保護の観点からの問題です。先に書いた通り新子山女魚の半分以上は海に下ってサクラマスとなる魚です。そして北海道の山女魚はサクラマスから生まれます。

ここまで書けば常識ある人間でしたらおわかり頂けると思いますが、何故明日の資源であるサクラマスの子供を釣る

のかという事です。魚影の濃かった昔は、釣り人が沢山の新子を釣り上げても大勢に影響なかったかも知れません。しかし、最近の溪流を含めた自然環境は、それを許さない状況にあります。もちろん、今でも沢山のサクラマスが自然に上ってきて、沢山の山女魚が住んでいる川もある事だと思います。でも、この先10年20年も同じように魚が居る保証は出来ますか。多分、誰にも答えられないでしょう。僕は極論を言えば幅広山女魚などは河川全部の魚を釣りきっても、新子が残れば数年で元の状態に戻ると考えています。勿論、極論でそうしてはいけない事は当たり前の事です。

一方、新子山女魚が釣りきられた場合は、壊滅的なダメージを河川に与えることでしょう。サクラマスが上らなくなりますからね。こうして川が釣り人によって資源が枯渇し、釣り人は他の有望河川へ釣り場を変えていきます。その繰り返しが、現在の状況ではないでしょうか。勿論、新子釣りだけがこの状況を作り出したわけではないと、思います。しかし新子釣りのインパクトは、非常に高いと僕は思っています。

僕は、新子釣りは既にやめています。勿論、針にかかる事もありますが、リリースしますし新子が群れている様な場所には竿を出しません。そして秋の産卵期には竿を置きます。自己満足にしかならない事なのかもしれませんが、将来も釣りを楽しんでいきたいと思っていますので、出来る事からやりたいと思っています。僕の釣りの姿勢はあくまでも自分の考えですから、読まれた方の考えとは違うかもしれません。

完全キャッチ&リリース派もいれば、数釣り肯定派の方もいるでしょう。それぞれの考え方の違いで議論する気はありませんが、将来も天然魚の釣れる溪流が残って欲しいと考えるのは同じだと信じております。

成魚放流された釣り場しか無くなったら、僕は竿を折りこの釣りをやめます。自然の中に、世代交代した山女魚が岩魚が住んでいる。当たり前の事が、これからもと願うのみです。(1997年11月23日筆)

## 続 思い出の溪

十勝川を上流に遡っていくと、北海道有数の大河であるこの川も溪流となっている。下流の濁った水とは違い、あくまでも透明、それでいて川幅広く悠々と流れている。川沿いの道を上流に向かうと、岩松ダムや十勝ダムを通り過ぎやがて一つの町を通り過ぎる。

富村牛村、普通はトムラウシとカナで書いた方が通じる。十勝川の最源流域部にある、最後の人里だ。このトムラウシを過ぎて暫くすると、十勝川はトムラウシ川水系とシイトカプチ川に流れを二分する。

この釣り場の対象魚は、野生化した虹鱒とオショロコマと言われている。初めてこの地を訪れたのは、知床の帰りに内陸部のオショロコマを見てみたいとの思いからであった。殆ど一睡もせず300Kの道のりを走り、トムラウシに着いたのは殆ど夕方に近い時間だと記憶している。シイトカプチ川沿いの林道へ入り、本流に点在する砂防堰堤で車を停めて試し釣りをする。このトムラウシ周辺は、知床羅臼の河川とは違い流れも速く、ポイントという物が存在する。オショロコマはあまり速い流れは好まず、淀みや倒木の影などで餌を待つ魚なので、狙いは落ち込みの際など流心を外れた部分。堰堤下に仕掛けを入れると、独特のアタリがすかさず出る。ゆっくりとした糸ふけにアワセをいれると、心地よい手応えが疲れを忘れさせる。

釣り上げると、7寸位のオショロコマ。やはりランドロックされた魚は、場所によって同じ種類でも少し様子が違う。知床のオショロコマに比べると、体高が高く腹の赤みも一段と鮮やかだ。これは標高の高いトムラウシでは、既に婚姻色が強く出ているのかもしれないが。やがて日が傾いて、山は夕暮れにつつまれた。竿をしまい帰路につく。ところが一睡もしていない体が、限界に達したのだろう。予定では夜通し車を走らせ、札幌へ向かう予定だったが、そうもいかない感じだ。

手元にあるガイドには、近くにトムラウシ温泉という宿泊の出来る宿があると書いてある。もし泊まれるものなら、泊まりたい。既に宿では食事の準備も終わり後片づけに入ろうかと思われる様子だった。

「一人なんですが泊まりますか?」「お疲れでしょう。どうぞ」予約もなしに泊まれた良き時代だったのだろう。温泉につかり体を暖めていると、急激に疲れが出てくる。食事を食べ終わった後は、知らぬ間に寝入ってしまい翌朝目が覚めたのは昼も近い11時頃だった。

目が覚め顔を洗っていると、宿の主人と思われる方に声をかけられた。「本当にお疲れの様でしたら朝食の時も起こさなかったんです。」都会ではなかなか味わえない心配りが嬉しい。遅い朝食を食べた後、釣り場の情報を教えて貰い、宿を出る。

昨日の釣りをした場所よりも、数キロ上流へ行かなくてはとの話だった。林道を進み、流れの対岸に支流の沢が流れ込んでいるのをみつけた。林道脇に車をとめ入溪する。その流れ込みは、大岩の脇から流れ落ちており、岩のえぐれは深い絶好の狙い場。セオリー通り上流からえぐれにむかい流すものの流速が速く、オモリを変えても一向にポイントに餌がはいらない。半分やけくそになり、えぐれに直接餌を入れて竿で誘いをかける。その時、えぐれの中から大きな影がゆっくりと現れたのがみえた。

不覚にも即アワセをいれてしまい、手元に戻ってきたのは千切れたミミズのみ。タバコを吸い時間稼ぎをする。再度、餌を付け直し、えぐれに向かって竿を誘導する。今度は魚影は見えないものの糸が大きくふけたアタリがでた。今度は慎重に糸を送る。

1秒・・・2秒・・・3秒。今だ！大きくアワセると、竿が弓なりになり強い引きが竿を通じて腕に伝わってくる。強引にえぐれから引き出そうと竿をたてると、身を揺るがしながら底から姿を現した。大きい！

糸は0.8号の通しだが抜きあがらない・・・。タモももたない北海道の溪流釣りでは、この様な時が困る。仕方なく首にぶら下げていた魚籠ですくい取るように取り込む。本当に大きいオショロコマだ。ところが針を外そうと魚をつかんだ瞬間に最後の抵抗をみせ、手から飛び出し元の流れに帰って行ってしまった。呆然と流れに立ちすくみ、流れに消えたオショロコマの幻影を見つめていた。逃がした魚は大きいというが、今回はこちらが魚籠にまで入れた魚だ。勝負には勝ったが、人間対魚では魚の勝ちということか。

ようやく気を取り直し、本流を遡行していく。ポイントでは魚は釣れるものの、逃がしたものの足下にも及ばないサイズばかり。その時、近くの河原で大きな足跡をみつけた。鹿じゃない狐でもない。そうヒグマの足跡だ。十勝川の源流域、彼らのテリトリーだという事を、釣りに夢中になり忘れていた。濡れた砂の表面がようやく乾いている状態で、足跡の部分はまだしっかりと濡れていた、ということは少し前に通ったという事だ。急に恐怖心を覚え、ゆっくりとその場を去る事にする。決して後ろをみないようにして。

一度、恐怖心がおきるとなかなか消えないものだ。背後からヒグマに見つめられている様に思える。いや実際に人間の様子を伺っていたと思う方が、無難かもしれない。林道に停めた車にたどり着き、ドアを閉じロックをしてようやく安心出来たものだ。

10年後、同じ場所を訪れ竿を振ってみた。魚信はなく変わらないのは、トムラウシの流れだけだった。10年の年月の間に、トムラウシも観光化され、沢山の人が訪れるようになっている。幸いな事に、無数にある支流域は未だオショロコマの楽園と聞いている。願わくばその楽園が失われず、更にはかつてのトムラウシが蘇る事を。

(1998年1月3日筆)

## 生きている川

十勝平野の南端に河口を持つ楽古川。台風などの後は多くの木々が流木となり、水の引いた河原には沢山の流木が点在する原始の流れを彷彿させる溪流だ。川は上流で、大きく流れを二分している。上流に向かって右が本流、左が札楽古川という。本流と同じ様な規模の支流の二つだ。この札楽古川を、昨シーズン数回釣り下った事があり今年の解禁後に同じ場所から入渓した。

橋から入渓して釣り下ると、川は昨年とは違い流れを大きく二分していた。昨年までは下流に向かって左に大きく蛇行して流れていたのだが、今年は左右同じくらいの水量の流れとなっているようだ。昨年と同様に、左側の流れを釣り下る。すると昨年はほぼ真っ直ぐに流れていた川筋が、途中で右に大きく流れを変えているのが見えた。ここまでは普通の溪流ではよくあること。しかし札楽古の流れは、予想を反するものだった。

右に流れが曲がったかと思うと、木々の間の土を削り川を形成していたのだ。流れの近くの木は、根が水流によって掘られ、少しの増水で流れに没する状態だった。昨年までの流れは既になく、僅かに認められるゴロタ石の筋が川だった事を示していた。

その昨年の川筋前には沢山の流木、まだ葉が付いている木が倒れて覆い被さっており、少し前までは林の中に立っていた木であることが判る。おそらく雪代の時期の増水で、河原の土が削られ根を掘られ倒壊したものだろう。

楽古川は平水の河川規模に比べ、異様に河原が広い川だ。河原の広い川は暴れ川。雪代や降雨の増水時には、河原一杯に水が流れ、流れの近くの木々を倒し新しい流れを作っていく。本流筋の河原に無数に点在している流木もその倒れた木々などであろう。

本流の橋を渡り、札楽古川の橋を渡り、そのまま道を進むともう一本の橋を渡る。橋の欄干には、「札楽古川」の名前が書いてある。橋の下には水は流れていない。増水時には、水が流れているのだろうか。

本流の下流にも、平水では水の殆ど流れていない川筋がある。かつては、こちらが本流の流れだったのだろう。溪流とはいえ、毎年の様に流れを変え時には川筋までも変える。これは本当に生きている川でなければ、あり得ない事なのだろう。

勿論、流域が安定していて、昔と同じ川筋を保っている河川も当然の事ながらあり得る。しかし、楽古の流れは自然のまま、自由奔放な流れと感じてしまう。この河川の姿が変えなくなった時。それは護岸工事や砂防ダムの建設でという事なのであろう。

木の覆い茂る林の中に、川がある。河原はまだなく、土が削られ溪水が流れている光景。これをみて人は何を思うのだろうか。(1998年7月15日筆)

## 頓別川の思い出

網走から海岸線を北上し、紋別を過ぎ更に北へ向かうと、右にオホーツク海を望み、左手は牧場となだらかな丘陵の広がる独特の風景が広がっている。町を出ると同じ風景が続き、暫くすると小さな集落があり、また同じ風景が続いていて、忘れた頃にまた集落があるという道北ならではの風景に異国感を味わう。

目的地である頓別川は、名流と謳われた道北の河川で数多くの支流を集め、浜頓別町でオホーツク海に注ぐ比較的大きな河川の一つだ。名流が故に釣り場の情報が紹介される事も数多く、また御多分にもれず河川工事や周辺の開発で荒廃しつつあると聞くものの、数多くの支流は未だ自然の姿を残している。

浜頓別を昼過ぎに通過して、国道を川沿いに進んでいく。敏音知を過ぎた辺りの頓別川は、ようやく清流らしい流れとなり国道は多くの支流を渡っていく。事前の情報もあまり無く、何処に入渓するという予定も特にない。支流の橋から上流の流れを想像し、目にとまった林道を進んでいく。川は道沿いを流れているのだが、暫くは所々に護岸が施されており牧場の中を川が流れるという感じで、溪流の趣にかける流れだ。

牧草地帯を抜けると木々が多くなり、やがて緑深い森となる。道を更に進んでいくと川を渡る小さな橋があった。その橋の手前には、「罨出没注意」の看板が立っている。しかし、この種の看板は、北海道では珍しい事ではない。都会を離れ、山林に入れば熊が生息していても不思議ではない土地柄なのが北海道なのだ。しかし、その看板は多くのそれとは違って一ヶ月前に罨が出没した事を知らせていた。

溪流釣りをする以上は、絶対に安全な場所はありません。100%の安全を望んだ時、北海道では溪流釣りは出来ないのだ。しかし明らかに危険と思う場所には行くべきではないし、それは溪流釣りをする人間の守るマナーの一つであろう。看板をみて入渓すべきか少し思案するものの、罨の行動範囲は広く同じ場所に留まっている可能性は少ないだろう。とはいえ別の罨がいる可能性もある。だが、それは何処の溪流でも同じことだ。熊鈴を二つつけ、腰の鉈を確かめながら橋より入渓した。

僕の溪流釣りは、基本的に川を下る釣りだ。理由は色々あるのだが、北海道の河川では落差の少ない川が多く、岸のえぐれや倒木の下などがポイントとなる事が多い。この為、餌を上流から流し込んだ攻め方が効果的と思うのだ。また、この流し方をした時の合わせが身につけてしまっている為、遡行した場合はどうも釣果が芳しくない。そして、この時も入渓した後はそのまま橋を下っていった。

魚影濃い道北の河川とはいえ、格好の入渓地点である橋の近くは、お世辞にも魚の出が良いとは言えない。それでも橋が視界から姿を消す場所まで下ったころ、ようやくアタリが多くなってきた。そのアタリの殆どは小さな山女魚で、釣ってはリリースの繰り返しだ。二時間ほど釣り下ったあと、入渓点を目指し拾い釣りをしながら下ってきた川を引き返した。日は大きく傾き、瀬音の聞こえる溪をほんのり赤く染めていった。瀬の波は青い水面に輝き、眼鏡を外して眺めると万華鏡の様に思える。涼しい乾いた北海道特有の風が溪を駆け抜け夕、暮れ間近を感じさせる。

タマズメだからだろうか、これまでの繊細なアタリとは違い、良型特有の流れるようなアタリが多くなってきた。大きなポイントでは、良型の山女魚が竿先を絞り込む。やがて、アタリの数は一投する毎にと思えるほど多くなってきて、釣れる山女魚も入渓直後とはまるで違い、丸々太った個体ばかりとなる。頓別川の古き良き時代に戻ってしまったと錯覚してしまうほど、次々と釣れる山女魚に夢中になり、時の流れるのも忘れ気がついた時は林の中に日が沈もうかとしている時だった。

溪流の夕暮れは早い。やがて溪は闇に包まれてしまうことだろう。竿をたたみ、橋を目指し早足に川を上っていく。

しかし、歩いてても歩いてても橋の姿が見えない。焦りを感じながら更に歩く。「おかしい・・・とっくに橋に着いている筈だ」西の空は赤く染まり、東を眺めると既に紫色に変わっている。溪に立ち止まり冷静になれと自分に言い聞かせる。橋から二時間ほど釣り下った・・・それから同じ時間は歩いている筈だ・・・しかも途中までは拾い釣り・・・今いる溪は橋の流れではない・・・。

夕闇が迫る溪を、走るように下っていく。足を石に引っ掛け転んでも、痛さを我慢している時間はない。目は、川筋だけを追っている。やがて、蛇行している流れに合流している川筋をみつけた。緑溢れる岸の木々も、今ではシルエットの様に黒いトンネルの様に思える。わずかに残る夕暮れの明かりと、星明かりに頼りにその川筋を遡行していく。足を滑らせ、川で転び全身ずぶぬれになる。痛さや寒さも感じるものの焦りが勝っている。

やがて僅かに見える水面の上に影絵の様な橋の姿をみつけた。安堵感が体を駆け抜け抜け四つん這いになりながら岸を上り車のキーを探して乗り込む。手の握力も寂しく震えながらエンジンをかけ着替えをした頃、外は漆黒の闇につつまれていた。

## ニジマスと溪流

### 十勝のニジマス

北海道の渓流域で、釣りの対象になる魚は多様だ。冷涼な気候がもたらす河川環境は、北海道にしか生息していないオシロココマを初め、蝦夷岩魚や山女魚を育む。また、アメマスやイトウなども、溪流と考えると在来種だけでも五目釣りの世界だ。

ここに、海外から移植された魚であるニジマスやブラウントラウトが加わる。勿論、これは放流という手段によって生息しているのだが、一部の河川では自然産卵をして定着しつつある場所も多いようだ。溪流釣りで十勝を考えると、不思議な事にニジマスをイメージするという。帯広で生活を始めるまで、十勝の溪流は澄んだ水の中に岩魚や山女魚の隠れた穴場というイメージを抱いていた。ところが実際は山女魚、岩魚も釣れるものの、ニジマスが殆どという川が多いのは意外な事実だった。

戸蔦別川などは全国的にニジマスの川として有名になっているし、新聞などの釣り情報でも、山女魚の他にニジマスの釣果が大きく扱われている。今でこそ釣りブームとなり、ファッション性もあるルアーやフライの対象魚として、ニジマスの人気は高いのは理解は出来るのだが、それにしてもという感はある。お断りしておくが、僕自身は山女魚釣りが本職とはいえ、ニジマスを見下しているわけではない。野生のニジマスのファイトは感動する程だし、ルアーのターゲットとしてニジマスを外すわけにはいかないくらいだ。

現在、十勝でニジマスの釣り場といえば然別川、音更川、十勝川本流、札内川、先の戸蔦別川。最近では、C & R区間の設定された佐幌川などが主な釣り場だ。ここで気が付くのが、十勝のニジマス釣り場と言われる河川は、十勝川水系であり、下流の千代田堰堤から上流域に位置する河川ということだ。そして、これらの河川はまず天然物の山女魚を望むことが出来ない河川である。

その代わりと言ったら語弊があるかもしれないが、山女魚とニジマスが入れ替わっているのが北十勝の溪流と言えよう。山女魚釣り師の立場から言うと少し寂しい気がするのだが、現にニジマスが生息している以上は受け入れて釣りを楽しむ他はない。

### ニジマスと釣り

ニジマスは、溪流釣りをしたことの無い人でも釣り堀などで、その姿を見たことがある魚だと思う。ニジマスの名前の由来は、英語名のレインボウ・トラウトの直訳だが、まさか七色をしているわけではない。特徴としては体中に散りばめられている黒点と、体側に現れる赤い帯だ。この赤い帯は、早春の産卵期には一段と濃くなり非常に美しい魚だ。但し、これは野生化した個体の話で、養殖されて育ったものは、どうもくすんだ色合いをしている様な気がする。

幼魚の頃は、山女魚の様に体側にパーマークと呼ばれる幼魚斑があるが、背鰭や尾鰭に黒点があるのがニジマスと覚えておくといいだろう。渓流域で釣れる魚の中では多分、一番のファイターと思われ、釣り人の針にかかるや下流上流に走り回りジャンプを繰り返す。このファイトが、ゲームフィッシングと言われるルアーやフライ釣りの絶好の好敵手となっているのだ。

但し、これまた養殖物の話となるが、池で生産性のみを追求されて育ったニジマスは、尾鰭が退化した様に丸く小さくなり、ファイトも大人しく、ジャンプもしない個体もいるのは事実だろう。都市部の釣り堀などでは、この手のニジマスが多いようだ。

以前、TVで関東の芦ノ湖で釣られた50cmを越えるニジマスを見て幻滅したことがある。それは止水で餌をふんだんに与えられブクブクと太ったニジマスで尾鰭は殆どなく鯉の様なニジマスであった。

十勝の川はニジマスの川。これはサクラマスが遡上しなくなった今、受け入れなければならない事実ではある。しかし、十勝の川で釣れるニジマスは釣り人から賞賛される逞しい野生であって欲しい。

## 放流の是非

北海道では、ニジマスが自然繁殖する条件が整っているようだ。この為、かつて放流された個体が、世代交代をして釣れる河川もある。道東の別海町を流れる西別川などは、その代表的な河川だ。また他の川でもかなりの数が放流が続けられている。

ここで僕が危惧しているのは、放流という行為がどこまで認められるかという点だ。あくまでもニジマスは外来種の魚であり本来は生息している筈はない。山女魚や岩魚を釣りに行きニジマスが釣れたら、釣り人はどう感じるだろうか。

僕は本来の環境、すなわち山女魚や岩魚が生息している流域に、新たに外来種を放流することに嫌悪感を感じる。自分は、ニジマス釣りが楽しいと感じているにも関わらずだ。そこには、溪流釣りは自然を楽しむという持論があるからに他ならない。そして自然というのは、基本的に人間の手が加わっていないという思いが強いのだ。例え、放流されたニジマスが野生に戻り、自然産卵をして生態系の一部となったとしても、それは本来の姿ではない。

しかし、本来、そこに住んでいる筈の魚が居ない場所であっても、一部の河川の様既に生態系の中に取り込まれている例もある。先の話と矛盾するのだが、このような川に棲んでいるニジマスには不思議と違和感を感じない。

僕の生まれる前よりニジマスが生息している様な場所は、僕にとっては自然の一部と感じているのだろう。そう自分の気持ちを、理解しているのだ。しかし、日高の溪の源流部など今でも天然の岩魚が生息する様な場所、自然が残されていると言われる場所は、勘弁願いたいと感じている。必要悪として、放流もやむなしと思うのはダムなどの様に遡上が阻害されていて魚も棲まない場所のみだ。これとて、本来その場所に生息していた魚を放して貰いたいのだが。

2011年5月21日追記

現在では、ニジマスは釣りの対象ではなくなっていました。また、道央や道南では、ブラウンが放流されそれが当たり前になりつつありますが、個人的には非常に嫌悪感を抱いています。但し、それは僕個人の感情であり、考え方なので他人にそれを押しつける気はありません。

ただ、ここ20年で道内の河川における急激な生態系の変化は、如何なものかとは思っています。かつてブラックバス騒動では、道内でもバスが見つかったと釣り人の間で大騒ぎとなった事があります。個人的な意見では、バスもブラウンも大きな違いはないのです。また、ニジマスですら近い感情が芽生えてきました。

本来、生息していない魚を釣るという事の違和感を感じたのかもしれませんが。例えば、ニュージーランドが好きな釣り人には申し訳ないのですが、この国のトラウトは”移植魚”だという事が、僕の中では全く魅力の無い場所と感じるくらいです。それくらい、最近の僕は、在来種の釣りを重んじるようになりました。

## 鱭の無いニジマス

昨年の夏、阿寒川と渚滑川を訪れた。何れの溪も、ニジマスが釣れる川として全国的に有名で溪相も抜群。特に渚滑川はキャッチ&リリース区間が設定され、魚影はすこぶる濃い。また、阿寒川も漁業権を持つ漁協が、定期的にニジマスを放流しておりそれなりの魚が生息している。

この二つの溪はルアー、フライを対象としたガイドブックに、紹介されない事はないと思えるほどの有名河川で既に全国区となった感がある。ガイドブックでは、溪相良く、良型のニジマスが狙えると書いてあっても、鱭の無いボロボロのニジマスが釣れるとはなかなか書いていない。それでも、最近では良識ある記事というか、理想と現実のギャップを、正確に記述していることも多いのだけれどね。

鱭の無い、あるいは丸いといったニジマスは、早い話が成魚放流された個体で釣り堀のそれと同じ魚と思っても間違いはない。流れのない池の様な養殖場で育った為、退化ではないけれども、鱭が成長しないんだろうね。ただ、養殖している場所によっては人工的に流れを作り、見た目も美しいニジマスを生産している場合があるので、鱭が伸びているからといって野生化したニジマスだとは言えないけれども、オッポレスとか雑巾と言われるニジマスよりは数段良いと僕は思っている。

話は元に戻るけど、先の阿寒川や渚滑川で、鱭の伸びた昔話に出てくるワイルドレインボウを釣るといのは実際のところ、かなり確率が悪い様だ。特に漁業権の設定されているピリカネツ上流やキャッチ&リリース区間では、釣れる殆どは放流されたばかりのオッポレス・・・。野生を取り戻して、逞しい魚も居ないとは言わないけど、数多くの針を見てきた魚は、そう簡単には釣り人の前には出てくる事はないだろうな。

このオッポレスのニジマス、だから何が気に入らないと言われれば何もかもと言ってしまおうな。姿は美しくないし、アタックしてくる動作も遅い、それとまず間違いなくジャンプしないもの。だから針にかかると鯉でも釣れたんじゃないのかと思うほどひたすら重いだけ。正直言って、ウグイが釣れてくれた方が面白いと思うもの。これがニジマスで著名な阿寒川や渚滑川で釣れる魚の殆どというのが嫌だね。

本来、ニジマスを放流する事が良い悪いという議論もあるけど、これらの溪は、かなり昔からニジマスが釣れる川として有名だったので、今更それを止めるというのは現実的ではないことかもしれない。ただ、何で成魚放流しなくてはいけないのかと思ってしまおうね。

本当は放流しなくても、自然産卵を繰り返して繁殖しているというのが理想だと思うけど、そのためには川に流れに負けない元気な魚というのが前提になると、僕は感じている。ところが、養殖池でぬくぬくと育ったオッポレスのそれは、少しでも増水して流れがきつくなってしまうたら上流に向かって泳げるんだろうかなんて心配しちゃうもの。

実際、渚滑川では放流したニジマスは、かなりの量が下流に下ってしまっているらしく、残りマスと呼ばれる野生化した個体は、紋別に近い流域で釣れるという話も聞いたことがある。まあ、これは流されて下ったのか生息に適する水温を求めて下ったのかなど色々な理由があると思うし、人づてに聞いた話なの真偽の程は判らないな。今年の渚滑や阿寒では放流したニジマスの追跡調査をするという話も聞いたことがあるから、一年後くらいには実態が掴めるかもしれない。

でも、40cmとか下手すると50cm近い成魚を放流するというのは、どうなんだろうね。昨年、渚滑川を訪れた時、岸際の倒木の間から、やっとの思いで出したニジマスは鱭もかなり成長していたから、それなりのファイトを楽めた。これは多分、その前の年に放流された残り鱭で、野生を取り戻しつつあるニジマスだった。

大きい個体は全て、こうありがたいよなあ、ホント。50cmを釣ったぞって、それがオッポレスだったら釣り堀と何が違うのかと僕は思うもの。これは釣り人の価値観の違いだから、そのようなニジマス釣って嬉しいという釣り人がいても僕は構わないんだけど、僕は写真を撮る気にもならないほど嫌な気分になる。確かに人の多い全国区の河川なので、放流直後はともかくとして、それなりに警戒心を持つようになっているのは事実だ。

だから、買い取り制の釣り堀の様に、節操なく釣れるわけではなく、それなりの腕は必要になると思う。そう考えると楽しさは無いわけじゃないけど、野生のフッキングした瞬間から猛然と走り回り、何度もジャンプを繰り返すニジマスを知っているだけに、やっぱり嫌だなあと感じてしまうんだよね。

結局、既に釣り人の多くなった川というのは、そのまま、釣りも出来て魚も育てようというのは無理な話なのかもしれない。渚滑のリリース区間でも魚を抜いてしまう人も未だにいるだそうし、阿寒に至っては、放流直後に無差別的な密漁が行われていると聞くしね。それに、稚魚とは言わないでも20cmクラスを放流したとした場合、リリースしても生き残れない魚も少なからずいると思うから、釣り人が多くなればそれだけで魚は確実に少なくなる。

結局のところ、稚魚放流して数年間は禁漁措置という方法しか無いんだろうなあ。川全部とは言わないまでも、一定の区間を禁漁にするだけでも、違うと僕は思うけどね。密漁等の罰則も強化してね。罰金なんて事はしなくてもいいから、顔写真入りのポスターを全部の釣具屋に配るなんてのは効果ありそうだ。なんだか、某業界の制裁措置に似ているなあ。おや？と思った人は何でそんな事、知っているのかな（笑）。

## 網走湖のワカサギ釣り

ワカサギ釣りと言えば穴釣りの姿を思い浮かべてしまうほど、氷上の釣りというイメージがある。今風の言葉で言えば、アイスフィッシングだろうか。その釣りの呼び方はともかくとして、北海道では一部の不凍湖を除いて結氷してしまう湖沼が多く、ワカサギの生息している場所では穴釣りが楽しめる。

注意点として、ワカサギの主な釣り場は漁業権が設定されており、釣りを楽しむためには北海道では馴染みの薄い、入漁料を払わなければならないということか。大抵は千円未満だと思うので一日の遊びとしては格安な部類だろう。

冬の間はオフシーズンというのが、僕の釣りのスタイルだったのが数年前のこと。昔では、初冬のアメマス釣りが氷に覆われてしまうと、今年はこれで終わりかと寂しい気持ちになったもの。ところがワカサギ釣りを始めてから、春まではワカサギかと車のタックルを交換するくらいのものだろうか。

僕が初めてワカサギを釣ったのが道東の網走湖だ。それからというもの近郊にもワカサギの釣れる場所があるにも関わらず、網走湖通いが続いている。理由は良く釣れるということもあるけど、魚体の大きな事と浅い湖なのでタナ取りが必要ないという安楽な面もあるのかもしれない。それに十勝は冷え込みが厳しいのでテントは必須だろうし。少し軟弱が入っているね(^\_^)。

ワカサギ釣りの道具は、他の釣りに比べると値段も安いので気軽に始められるというのも良いね。ルアーでもフライでも安いタックルもあるにはあるけど、それなりの費用は必要だ。道具仕立が簡単な餌の溪流釣りも今はかなり高価な道具が多くなった様な気がする。

それはさておき、ワカサギ釣りの道具について少し書いておこうと思う。まずは竿、間違ってもロッドと書いてはいけない。そんな事はどうでもいい話だけど、この釣りは日本のものというイメージが強くてね。勿論、欧米でも凍った湖で釣りをするという事もあるだろう。現にRAPALAからは、アイスフィッシング専用のバーチカル・ジグという穴釣り専用のルアーも発売しているくらいだ。まあ呼び名はともかくとして・・・ワカサギ釣りの竿は昔は伝統的に鯨の髭を使っていたらしい。

細くて弾力性のある物で天然素材はというと、昔は鯨の髭が丁度良かったのかもしれないね。知っての通り、現在では捕鯨は禁止（これってIWCを脱退してしまえば、それまでのような気がするけどね、どうも捕鯨云々に関しては胡散臭さがねえ）で入手は極めて困難だ。

今、釣具屋で市販されているのはグラス、カーボン、あるいは竹という製品もあると思うけど一般的には安いグラス素材の物だろうか。これには二種類あってリールシートが付いているもの。もう一つは糸を巻き付けられる様になっている通称、テバネと呼ばれているものがある。網走湖に関しては、水深が浅いのでテバネで十分だし、下手にリールが付いていると邪魔になると思う。ただ、何れにしても竿の長さは短めの方がよく、「大は小を兼ねる」と、長い竿を買っているとテントの中などでは邪魔になりやすい。

僕は手元がパイプになっていて、竿先が収納出来るタイプの竿を愛用している。延ばした時の長さが60cm程度でテントの中でも邪魔にならず調子も良いので同じ竿ばかり三本も買ってしまった。竿の話だけど、重要な事が一つあって、柔らかさがかなり釣果に影響するような気がする。勿論、これは僕の考えであって逆だという考えの人もいるだろうから絶対とは言えない。

ただ網走湖は浅い湖の為、山上湖の様に重たい錘を付ける必要がないというのは事実だろう。軽い錘で良ければ、竿もそれなりの柔らかい物で十分ということになるからね。ついで糸だけど、これも軽い錘で十分という釣り場の特徴から言うと、太い物は必要はない。かといって、現在の溪流の様に極端に細い糸を使うと仕掛けが氷に引っかかっただけで簡単に切れてしまうから、1号はあった方が良いでしょうね。

それと氷上では透明な通常の糸は非常に見にくい為、黄色やオレンジなどに染めた物が良い。ワカサギ専用として売られている糸は全て着色しており、尚かつ糸に氷が付かないような加工がされている様だ。その効果はまあ普通の糸よりは良いというレベルで全く凍り付かないというわけにはいかない。それでも値段の高い物ではないので専用品の方が後で後悔しないと思う。

仕掛けは釣具屋に行くと色々売っているね。スキンが付いた物、ゴム製の虫が付いた物。針の色が赤い物、針と糸の結び目に玉が付いていて色々着色されているもの……。正直言うと僕も初めてのワカサギ釣りの時、餌を付けるのが面倒だからと、この手の仕掛けに手を出したことがあるけど、結局は釣りにならず、シンプルな仕掛けが一番良いと思っている。

餌は、ラピッドとかベニサシとかシロサシなど、色々な物が売られている。個人的にはシロサシと呼ばれる昔から売られている物が喰いが良いと感じる。ベニサシの方が良いという人も多いけど、網走湖に関する限りはシロサシが一番安定している。時にはベニサシが、良いということもあるだろうから絶対とは言わないけどね。

仕掛けの話に戻ると、針の大きさは2.5から3の間が網走湖の標準だ。小さい新仔を狙うのなら小さめの針と小さな餌が有効かもしれないけど、ワカサギの口はかなり大きく針が大きいからと言って乗らないと感じたことは少ない。あと針の数だけど、場所を網走に限定して言えば、6本前後の物が効率が良いような気がする。

このワカサギは大型になるので、左右に走られ仕掛けを上げる時、氷の角に引っかかり外れてしまうことが多いのだ。針が多すぎると氷に引っかかる確率が増えるし、針の数が多いからと言って、余計に釣れるわけではない。それに高価だしね(^\_^)。

錘の下に「下針」が付いている仕掛けも売られているけど、網走湖では無い方が無難だ。これは水草に引っかかりやすいということと水底でじっとしているヌマガレイが釣れやすいからだ。逆に、ヌマガレイを釣りたいという人は下針を付きの仕掛けで底に錘をつけ黙っていれば、そのうち釣れると思う（保証は出来ないけれどもね^^)。

錘に言うと市販の仕掛けは大抵2.5号くらいの物が付いている事が多い。僕は仕掛けは市販品を使うけど、錘だけは1号の軽い物に換えている。竿が柔らかいという事もあるけど糸フケでアタリを見ているので軽い方が釣りやすいからだ。

(勿論、そのまま使ってもワカサギは釣れるし軽いからと言って喰いが直接良くなるわけではない。ただ、これに関しては釣り方のところで補足説明をする予定)

釣り道具はこれだけあれば釣れるけれども、最も重要なのが服装かもしれない。まさかTシャツとショートパンツという人はいるわけがないけど湖上の釣りは体を動かさない為にやはり冷える。特に用意を怠ると辛いのが足下の寒さだと思う。これは各自色々な工夫をしている様で、氷の上に発泡スチロールを置いたり、厚いソックスを身につけたりと色々な方法があると思うけど、肝心なのは靴の性能だと思っている。

アウトドアショップなどではブランド物の防寒靴が売られているけど、これは高価だ。一番、無難なのが普通の靴屋さんで売られているインナーソール内蔵の長靴かな。

但し、それなりに厚さのあるインナーじゃないと氷上の冷たさを遮る事が出来ないの、厳寒仕様で値段もそれなりの物を買った方が無難だと思う。極端な安物は後々、後悔することになる。それと網走湖は結氷したといってもシーズン初期は氷の上に水が走っている事があるので単なる防寒靴は不可だね。表面はゴムの長靴が一番ということを書いておきたい。

ワカサギ用のテントがあれば上下は普通のスキーウェアで十分だが、厳寒期に外でという事になるとダウンジャケットが一番だと思う。ダウンよりも高性能を売り文句にしている製品もあるけどダウンほどの量を使っている製品が少ない。結果的にダウンジャケットが一番暖かいということになる。あとグローブは出来れば指付きで厚みのあるネオプレーン製が一番良いと思うけど、餌を付ける時以外は物が摘めればというレベルであれば使える筈だ。餌付けだけ素手で行えば良いだけの話だからね。

個人的に今のところはモンベルのグローブが一番、使いやすいと思っている。詳しい品番は忘れたけど、これは厚さがあって保温性も高いし、釣りに使える柔軟性もある製品だ。ただ、指の部分が折り畳める物と畳めない物があるけど断然、畳めない物を推挙したい。折り畳める物を持っているけど、マジックテープが付いていて糸が絡むんだよね。釣りをしていると本当に煩わしく感じるもの。

道具の話はこれまでとしておいて網走湖の釣り場は大きく分けて二カ所あると考えていけば間違いはない。

一つは、沢山のホテルやスキー場もある呼人地区で、ここには観光協会がワカサギ釣り場を開設している。駐車場やトイレ、竿などのレンタルや氷の穴開け（有料）も完備しているので、手軽にワカサギ釣りを楽しめる。もう一つは女満別湖畔で、ここは夏はキャンプ場となる場所で呼人と同じように穴開けなどのサービスもある。ただ時期的に女満別湖畔はシーズン中盤からが良いようで、解禁当初は呼人地区が人気が高いようだ。それでも、状況は一刻一刻と変わってくるのがワカサギ釣りなので、事前の情報を入手するのが一番だと思う。

これら二つは網走湖の二大釣り場というべき場所ではあるけれども、広い湖にはポイントは無数にあると言ってもいい。ドリルさえあれば何処でも竿を出すことが出来るし、やはり静かに釣るのが釣果の面でいえば一番良いようだ。（2011月追記：現在では呼人と女満別の二カ所のみワカサギ釣りが許可されています）

呼人と女満別の観光釣り場は、家族連れや女性同伴でも楽しめるというメリットがあるものの、いかんせん人が多すぎる。但し、観光釣り場はそれぞれの観光協会が漁協へ入漁料1000円のうち200円を補助している様で区域外での釣りは1000円となる。（2011月追記：現在では呼人と女満別の二カ所のみワカサギ釣りが許可されています）

釣り場へ到着すると何処の場所でも、まず釣り座の確保をしなければならない。この釣り座がかなり釣果に左右されるので、入念に周りをチェックと言いたいところだが、穴が僅か30cm違っただけでも釣果に大きく違いが出る事があるのがワカサギ釣りだ。

そんな馬鹿なと思うかもしれない。30cmは大げさだろうと思う人もいると思う。しかし、これは紛れもない事実で、こればかりは運そのものだと思う。何れにしても、10分くらい竿を出せば釣れるか釣れないが判る。その場合は釣り座を移動するか、今は釣れなくてもいつか群がやってくると信じて粘るかの選択をしなければならない。

僕は溪流釣り出身なので、釣れないと即座にドリルを持ち場所を移動する人間だ。ただ、移動しても釣れる保証は何もないことだけは書いておきたいと思う。こればかりは釣り人の思想であり経験であり知恵であろうか(^\_^)。さて、ようやく釣り座を決めると、今度は穴開けが待っている。自前のドリルがあれば、ここぞと思う場所でゴリゴリと音をたてて穴を開けていけば良い。

ドリルの無い人は、観光釣り場であれば係の人に頼めば開けてくれるし、近くの人へ何か差し入れをしてドリルを借りる手もある。ただ、このドリルだけ何度も穴を開けていると、刃が甘くなってくるものだ。言うなれば消耗品的な道具であるので、暖かい缶コーヒーくらいの気遣いはした方が僕個人としては無難かなと思っている。

(ちなみに僕は何も要らないし、常識をわきまえた言い方をすれば快く貸してあげるけどね)

穴を開けたら、水面に浮かんでいる氷や雪を「お玉」の様な網で取り除いていく。釣り具屋では、これ専用の網が売られているから、何度もワカサギを楽しむというのであれば買い求めた方が良いだろうな。野外で釣る場合、開けた穴の水面が再凍結してくるから、これはコマメに取り除く必要がある。お勧めは、炭の小型ストーブでお湯を沸かし、時々穴にお湯を入れてあげることかな。

炭はそれ自体が暖になると、ガソリンストーブなどと違って燃費が良く長時間燃えているからね。一番、良いのは練炭だけど、これは専用のストーブが必要なので、冬のワカサギ専用になってしまう。何れにしても直火があると冷えた手を暖める事が出来るし、穴にお湯を入れる事によって凍り付いた糸を解かすことが出来るのが利点だろうか。

穴が開けば、あとは仕掛けを取り出し、餌をつけ穴に降ろすことになる。餌の付け方はサシの平たい方を「ちょん掛け」にする。この時に針先は必ず出すようにするのがポイントだ。サシは皮が固く、針先がサシの中にあるとワカサギが喰ってアワセを入れたところですよ抜けてしまう。

網走湖で一般的なポイントの場合、水深が1.5mから2mという浅い場所が多いため、仕掛けを含めた糸の全長は錘が底に付き、糸を張った状態で楽に釣れる姿勢がとれる様に糸の出し具合を調整する。基本はこの状態で通常は錘が底につくかつかないかの状態で竿先を細かく、ゆっくりと上下させワカサギに誘いを入れる。

アタリは竿先にも出てくるし、大型のワカサギであれば竿を持つ手にブルブルという感触が伝わってくるはずだ。

アワセは一般の釣りのように手早く行くとワカサギの口が切れ、魚が外れてしまうので、腕全体を引き上げるという感じかな。何れにしても、これは何匹かのワカサギを釣り上げれば、感覚として判ると思うので実践あるのみだ。

こう書くと難しそうに思えるかもしれない。でも子供でも釣れる釣りであるから直ぐに慣れると思うけどね(^.^)。

腕を上げワカサギが乗ったら(掛かったらという表現はワカサギ釣りに限らず、どうも最近は好きになれないなあ)同時に竿を持つ反対の手で糸をつかみ仕掛けをたぐり寄せる様に引き上げる。この時、大きな網走湖のワカサギは左右に走り回る事が多いので、氷に引っかからないようにしなければならない。せっかく乗ったワカサギもこの時にバレるのが一番多いのだ。

穴の中からワカサギが出てくれば、即座に外して再び、仕掛けを穴に投入する必要がある。群で泳いでいるワカサギは一匹釣れれば、その場所に群が来ている可能性が高い。ここで魚を外す作業に手間取ったり、仕掛けが絡んでしまったりすると群が既に遠ざかっているという事になる。

ワカサギの口は柔らかいので普通はワカサギを掴んで引っ張れば簡単に針は外れる。但し、下顎に掛かってしまった場合は小さなワカサギと言えども外れるものではないから、この時は針を持って外さなければならない。何れにしても針を外す作業がこの釣りの一番の釣果の分かれ目でこれも慣れるしか方法はない。ちなみに僕は必ず錘を穴の角に引っかけておき左手で糸を斜めに張った上でワカサギを外しているけどね。

餌のサシは皮が固く、一匹釣れたくらいでは針から外れることはない。ただ何匹は釣れたり下顎に掛かって針をつかんだ時など、僅かながら少なくなっていくから、ある程度の状態になれば新しい餌を付ける必要はある。

ここが難しいところで、釣れている時は餌を付けている暇も惜しいという事が往々にしてある。ところが餌が無ければ釣れないのは間違いのないところで、どここのレベルで餌を付ければ良いのかは難しい問題だと思う。僕の場合は釣れているタナの針で3本の針のうち餌が一つになったら、餌を付けることにしている。

6～7本の針が上下に並んでいるのがワカサギの仕掛けで、浅い網走湖とはいえ、上の数本にばかり掛かる事もあれば、下の数本にばかり掛かるなど底近くか水面近くかというレベルのタナは存在するからね。

ようするに釣れているタナの餌で、半分以下になれば釣果も悪いだろうという考えからだ。だから3本の針のうち2本に餌が付いてれば、そのまま釣っていた方が効率は良いだろうと思っているだけかな。流石に3本の針で一本だけという事になると、心寂しくなるもんなあ(笑)。でも、餌の付いていない針にも喰ってくる事があるから、釣れている時はどうでも良いような気がするけれどもね(^\_^)。

これまでが網走湖におけるワカサギ釣りの概要だ。ここで少ないワカサギ釣り経験しかない僕の、根拠のない僕の釣り方を紹介しておこうと思う。まず、竿は超軟調とも言うべき、ふにゃふにゃの物を使う。これは市販されていて、ガラスの平板を削って薄くしたものだ。一般に売られている中では、最も柔い竿だと思うけど強度はガラスだけに折れたりすることは余程変な使い方をしない限りは大丈夫の様だ。

錘は茄子型でも樽型でも良いけど、1号程度の物に付け替えている。この仕掛けを投入し、底に錘がついた状態で超軟調の竿がオジギしない程度まで糸のテンションを緩めるのが、ホームポジションとなる。

ようするに糸は張っていても、錘や竿の弾力の加わっていない状態を保つという事かな。この状態で糸の様子を凝視していると、極僅かに糸が呼吸をするようなアタリが判るし、大型のワカサギが餌を舐めるようにしているアタリも判る。ただ、この時はなかなか針に乗せる事が難しい為、じっと待っていると、次に糸が引き込まれるようなアタリとなる。この時がアワセのタイミングで99%は乗るね。

この釣り方は、網走湖でしか通用しない釣り方かもしれないけど、喰いの渋い時や大型を狙う場合はかなり有効だと思っている。大型のワカサギは警戒心が強いのかどうか本当の理由は判らないけれど、大型になればなるだけアタリは小さい様な気がする。

竿先をふるわせるようなアタリは、概して中型や小型のワカサギが多いし、喰いが悪い時は餌を疑っているような感じなんだよね。逆に言えば、喰いが立っている時はこの釣り方よりも一般的な竿を時々上下させ、誘いを盛んに入れた方が釣果は上がると思う。

置き竿が効果的な場合も、ワカサギ釣りの場合はあると聞いているので、僕の釣り方は置き竿に近い釣りなのかもしれないね。ところで釣れたワカサギだけど、癖がなく非常に美味しい魚だ。山上湖のワカサギは水質が良い為、味は上と聞いているけど、網走のワカサギも海から遡上した個体なので、その身は美味しい。

一般的には、空揚げか天麩羅にして食べることが多いみたいだね。でも僕は網走のワカサギは塩焼きが一番美味しいと思っている。ただ塩焼きにするには、それなりの大きさのワカサギが欲しいね。特に産卵を控えた抱卵ワカサギは、柳葉魚の様に食感も楽しめるし酒の肴として、お勧めだ。

冬なので、家に持ち帰るまで鮮度が落ちるということは少ないけれど、釣ったワカサギをフリーザパックなどに入れて周りに雪を詰めておけば更に鮮度の落ちは少ない。溪流釣りのシーズンオフ・人によってはウミアメを狙いに行ったり、管理釣り場で釣りを楽しんでいる人もいる。勿論、これも面白いと思うけど、ワカサギ釣りもやってみれば、なかなか奥が深い釣りだと感じる筈だ。一度はやってみるのも面白いと思うけどね。